HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	聖園農場･武市安哉の思想と北海道開拓者精神史的意義
Author(s)	白井, 暢明
Citation	基督教学, 37, 21-22
Issue Date	2002-07-04
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46660
Type	journal article
File Information	37_21-23.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

研究発表要旨

聖園農場・武市安哉の思想と北海道開拓者精神史的意義

白井暢明

聖園農場は、高知の自由民権運動家でキリスト教徒であり、当時国会議員でもあった武市安哉に率いられ、北見の北光社と同様、キリスト教精神に基く理想主義的農村共同体の形成を目的として、現在の浦臼町に明治26年、入植した団体である。他の同種団体と比較した時のその固有の特色と開拓者精神史的な意義は何か、これがここでのテーマである。

彼の周辺にいた人物の著作や証言、土佐の自由民権運動の機関紙であった『高知新聞』や『土曜新聞』、『福音新報』などの関連記述、そしてこれらの資料を丹念に収集、構成して書き上げた崎山信義氏の著書『ある自由民権運動者の生涯』などの資料から、武市安哉が北海道開拓移住と聖園農場の創立を思い立った動機は次の三点と推測される。①土佐国特有の土地の狭さから来る生活困窮からの農民の救済。②政治的な改革に対する武市の失望。③キリスト教的教育による人間改革の理想。

国会議員生活の中で彼は政治的世界の不浄さ、腐敗堕落と自分の理想との乖離に強い幻滅、失望感を抱いた。こうして彼が選んだ道は人間の内面からの改革、そのためのキリスト教的教育であり、これが具体的な形をとったのが、新天地、北海道における、生存の基盤としての土地と労働の上に築かれる生活と内面的信仰が一体となった理想的共同体建設であった。重要なことは、彼が民衆を救う二つの道、つまり政治的手法と宗教的教育・実践とを二者択一として立て、自らの道として明確に前者を捨て、後者を取ったことである。ここに終生政治活動への執着を捨てきれなかった坂本直寛らとの決定的な違いがある。

この聖園農場の特徴としてまず第一に挙げられるのは、ピューリタン的倫理の浸透と武市の宗教的感化力の強さ、即ちカリスマ性である。

一．いかに多忙の時にも、日曜日には業を休んで礼拝に出席すること。

二．農場内において、何人も酒類の売買をせぬこと、また何人も飲酒すまじきこと、という二つの誓約はこの集団の唯一の律法であった。第二の特色は、武市の教育への並々ならぬ情熱である。彼の指示で真っ先に学校が建築され、ここは教育と宗教の拠点になった。また、留岡幸助の発起による「冬季学校」に聖園から積極的に青年を送り込んでいること、更に、東北学院院長押川方義との協力で聖園に「開拓労働学校」を作る計画を持っていたことが注目される。第三に、この聖園から多数の者が様々な形で新天地へ転出して行ったことが挙げられる（脱出のエートス）。聖園の幹部であった前田駒次が北見・北光社へ、そして野口芳太郎が北光社を経由して30年に遠軽の学田農場へ指導者として転出していったのをはじめ、34年以降、士別、名寄、美深へ、更にはブラジルなど内外の新天地への転出、農業、宗教両面での活躍、成功が顕著である。

武市の「開拓労働学校」構想との強い関連性を推測させるのは、聖園から野口芳太郎が転出した「遠軽・学田農場」である。これは、押川方義とその弟子、信太寿之らによって企画・組織されたもので、北辺の防備と拓殖の見地から、将来を担う有為な人材を養成するためにキリスト教主義の私立大学を、未開地の開拓から生ずる利益をもって設立するというのが趣旨であった。この学田農場に関して、従来の諸研究が参照していない資料である『片岡健吉日記』などから知られる当時の高知及び東京での関係者たちの交流状況、そして『土曜新聞』、『福音新報』などに散在する関連記事などから次のような仮説が成立し得る。即ち、この構想は、武市と押川の間で企画されていた「開拓労働学校」の構想が武市の急死の直後に、そのいわば代替案として、武市の遺志を引き継ぐ形で生まれたこと、更に、北見・北光社の構想もこの学田構想に触発された高知側のリアクションとして生まれ、土地の選定や実施計画もこの両者が並行して、しかも交互に関連しあいながら進められたことである。このことは同時に、浦臼・聖園農場、遠軽・学田農場、北見・北光社のキリスト教的開拓移住は相互に密接に関連して

いること、そしてその中心に位置し、学田農場や北光社を生み出したものこそ武市安哉の理念と実践であったことを意味している。

研究発表要旨

神話と物語——ハンス・W・フライのシュトラウス批判

石川智子

シュトラウスの『イエス伝』（一八三五年初版）は、近代以降の学問的な聖書研究の端緒に位置づけられる重要な著作であり、この著作で展開された福音書の「神話的解釈」は、その後の研究によって精緻化されていく方法論を予感させるものである。シュトラウスは『イエス伝』で福音書批判をするに先立って、ホメロスの作品に対するギリシア人の解釈から同時代までの聖書解釈の歴史をたどった上で、自らが依拠している神話的解釈の立場を明らかにし、この立場から福音書全体を検証すると宣言している。しかしながら、シュトラウスの「神話」概念はそもそもカテゴリー・エラーである、と批判するのがハンス・フライ（一九四二～一九八七年）である。

フライは主にアメリカにおける「物語神学」の旗手として活躍した神学者であるが、『聖書物語の蝕』（一九七四年）のなかで聖書の歴史的批判的研究に対する批判をおこなっている。フライは18世紀から19世紀の初期にかけて聖書解釈に根本的な変化が生じたと見ており、そのような変化が生じる前の聖書の読み方は「リアリズム的」、すなわち「字義的かつ歴史的」なものだったという。しかし、理神論から出発した聖書批判と歴史的批判が、それまでは分かち難く結びついていた二つの要素、すなわち聖書の物語の字義的な意味と実際の出来事への指示を引き離し始めた。実際に起こった出来事と物語の意味が物語形態と分離できるものと見なされ、また出来事が実際に起こったかどうかに関わらず、聖書の物語の意味を取り出すことができると考えられるようになったのであ